トラークル研究

第十号

2013 年 10 月

トラークル協会

〒270-0122　千葉県流山市大畔 237－3　三枝紘一方

Tel 04－7150－5782　Ｅメール saegusakouichi@yahoo.co.jp

トラークルの用語 „Tod“ について

—解釈と翻訳—

伊藤卓立

I

ニーチェは „Die fröhliche Wissenschaft“ を 1882 年に出版したが、このアフォリズム集は「前書き」、「序曲」、並びに、「第一の書」、「第二の書」、「第三の書」そして「第四の書」から成り立ち、「序曲」には „Scherz, List und Rache Vorspiel in deutschen Reimen“ というタイトルが付けられ、本文では「第四の書」のみに „Sanctus Januarius“ というタイトルが付けられていた。さらにニーチェは、„Wir Furchtlosen“ というタイトルが付けられた「第五の書」と、„Lieder des Prinzen Vogelfrei“ というタイトルが付けられた「補遺」を増補して、決定版ともいうべき第 2 版を 1887 年に出版した[1)]。この決定版には 385 のアフォリズムが収録されているが、その中で、ヨーロッパの精神史にとって先ず注目されるのは、「第三の書」に含まれるアフォリズム 125 番 „Der tolle Mensch“ である。このアフォリズムは、ハイデガーが 1950 年に出版した論文集 „Holzweg“ [2)] に収録した „Nietzsches Wort 'Gott ist tot'“ [3)] において全文が引用され、世界的に知られるようになったが、トラークルの用語 „Tod“ について考察を目指す我々にとって興味深いのはその中の次の箇所である。

> Habt ihr nicht von jenem tollen Menschen gehört, der am hellen Vormittage eine Laterne anzündete, auf den Markt lief und unaufhörlich schrie: „Ich suche Gott ! Ich suche Gott !“ ... „Wir haben ihn getödtet, - ihr und ich ! Wir Alle sind seine Mörder ! ... Wohin bewegt sie (Sonne) sich nun ? Wohin bewegen wir uns ? Fort von allen Sonnen ? Stürzen wir nicht fortwährend ? Und rücktwärts, seitwärts, vorwärts, nach allen Seiten ? Giebt es noch ein Oben und ein Unten ? Irren wir nicht wie durch ein unendliches Nichts ? Haucht uns nicht der leere Raum an ? Ist es nicht kälter geworden ? Kommt nicht immerfort die Nacht und mehr Nacht ? Müssen nicht Laternen am Vormittage angezündet werden ? Hören wir noch Nichts von dem Lärm der Todtengräber, welche Gott begraben ? Riechen wir noch Nichts von der göttlichen Verwesung ? – auch Götter verwesen ! Gott ist todt ! Gott bleibt todt !“ [4)]

すなわち、ニーチェによれば、キリスト教の神はキリスト教徒自身によって殺され、死んだままである。そして、この神の死とともに世界の中心は失われ、世界秩序は崩壊し、今や世界に広がってゆくのは混乱と虚無と闇と冷気であり、漂っているのは死んだ「神の死臭」であると。

ところで、このニーチェのアフォリズムにはトラークルの重要な基礎語が見いだされる。枚挙してみれば、次のようになる[5)]：

> Mörder（15 回）; leer（49 回）; kalt（40 回）; Nacht（291 回）; tot（46 回）(<Toter

（16 回）、Toter/Totes（13 回）、Totes（15 回）、Tote(sg.)（4 回）、Tote(pl.)（12 回）、Tote(sg,/pl.)（4 回）(tot に関連する語の使用は 66 回）; Grab（< graber, begraben）（35 回）; Verwesung（21 回）（＜ verwesen（13 回）、verwesend（8 回）、verwest（8 回）、Verweste(pl.) (2 回）、Verwester (1 回）、Verwestes (1 回）合計：Verwesung に関連する語の使用は 54 回）、Gott（99 回）

このようにトラークルの複数の基礎語がニーチェのアフォリズム 125 番の中に見いだすことができるということは、トラークルがニーチェの影響を、『ニーチェの言葉「神は死んだ」』の影響を受けていたことを如実に物語っているが、トラークルがニーチェの „Die fröhliche Wissenschaft“ を所有していた直接の証拠はない。しかし、トラークルがニーチェの主要作品を所有し、中でも „Also sprach Zarathustra“ (1885)、„Die Geburt der Tragödie oder Griechentum und Pessimismus“ (1872)、„Jenseits von Gut und Böse“ (1886) の 3 冊の書名は確定されている[6)]。さらに、トラークルが「ニーチェを痛く愛好した」、という弟フリッツの思い出の記も伝わっているので[7)]、ニーチェの影響を受けたトラークルの詩的世界をニーチェ的「神の死」に起因する「中心の喪失」、「崩壊」、「混乱」、「虚無」、「夜」、「闇」、「冷気」が支配していても、さらにそこに「神の死臭」が漂っていても何ら不思議はない。

さらに、このコンテキストにおいて注目したいのは、「第五の書」の冒頭に置かれたアフォリズム 343 番 „Was es mit unsrer Heiterkeit auf sich hat“ である。

> Das grösste neuere Ereigniss, - dass „Gott todt ist“ dass der Glaube an den christlichen Gott unglaubwürdig geworden ist - beginnt bereits seine ersten Schatten über Europa zu werfen. Für die Wenigen wenigstens, deren Augen, deren Argwohn in den Augen stark und fein genug für dies Schauspiel ist, scheint eben irgend eine Sonne untergegangen, irgend ein altes tiefes Vertrauen in Zweifel umgedreht: ihnen muss unsre alte Welt täglich abendlicher, misstrauischer, fremder, „älter“ scheinen. ... das Ereigniss selbst ist viel zu gross, zu fern, zu abseits vom Fassungsvermögen Vieler, als dass auch nur seine Kunde schon angelangt heissen dürfte; ... Diese lange Fülle und Folge von Abbruch, Zerstörung, Untergang, Umsturz, die nun bevorsteht: wer erriethe heute schon genug davon, um den Lehrer und Vorausverkünder dieser ungeheuren Logik von Schrecken abgeben zu müssen, den Propheten einer Verdüsterung und Sonnenfinsterniss, deren Gleichen es wahrscheinlich noch nicht auf Erden gegeben hat ? [8)]

すなわち、ニーチェによれば、「神の死」の暗雲がすでにヨーロッパの空を覆い始め、「崩壊」、「破壊」、「没落」、「瓦解」、永遠の「闇」が眼前に差し迫っているのにもかかわらず、多くの者達にはそれが認識できないでいる。しかしながら、世界に日食を、暗黒をもたらす「神の死」を認識している「予言者」は少数ではあるが存在すると。事実、ニーチェの愛読者であったトラークルは、Prophet という言葉をわずか 4 頁しかない散文 „Aus goldenem Kelch. Maria Magdarena. Eine Dialog“ において 3 回も使用している[9)]。さら

に、自伝的要素が強い散文詩 „Traum und Umnachtung“ において、詩人自信の投影ともいえる „er“ を Prophet と同意語の Hellseher という言葉で次のように置き換えている。

Wenn der Herbst kam, ging er, ein Hellseher, brauner Au.[10)]

ところで、このニーチェのアフォリズム 343 番にもトラークルの重要な基礎語が見いだされる。それを枚挙してみれば、次のようになる[11)]：

Schatten （225 回）; untergangen<untergehen （10 回）、Untergang (22 回) ; Schrecken (13 回); Sonnenfinsternis<Finsternis（23 回）

このようにトラークルが自分の詩作品の中で Schatten を 225 回も、Finsternis を 23 回も使用していることは、トラークルが「神の死」の暗雲がすでにヨーロッパに黒い影を落とし始めていることを認識していたことを、またそれと同時に、Untergang を 22 回も使用していることは、トラークルがキリスト教の信仰によって秩序づけられてきた世界の崩壊、破壊、没落、瓦解が差し迫っていることを認識していたことを如実に示している。すなわち、„Menschheitsdämmerung“ [12)] の詩人であるトラークルは「神の死」を伝える少数の「予言者」のなかの一人なのである。それ故、ニーチェの言葉「神は死んだ」の影響をトラークルが内容面においても言語面においても同じように受けている、といえる。事実、ハーニッシュとフライシャーは共著の中で「ゲオルク・トラークルの詩作品を貫いている定旋律、それは死と滅び (Tod und Verfall) である」[13)]、あるいは、古くはラッハマンも「トラークルのどの詩も死の歌と名付けることができよう」[14)] といっている。クビーンは、トラークルの詩の世界の定旋律「死と滅び」、「死の歌」を 13 枚のペン画によって視覚的に表現したが、中でも次の三枚[15)] は注目に値する。

Die Poesie des Friedhofs（Abb. III）
Die Leiche im Nachen（Abb. XI）
Das tote Kind（Abb. XII）

ところで、マウアーは、トラークルの „Offenbarung und Untergang“ における死について、「ブルジョワ的満足の時代のただ中に・・・思いがけずに死が染み出てきたのである」、すなわち、「神の死」と共に、トラークルが所属するブルジョワ

Die Poesie des Friedhofs

Die Leiche im Naschen

Das Tote Kind

的人間存在のただ中に、「思いがけずに死が染み出てきたのである」[16]、といっている。それ故、「死」はトラークルの詩的世界の構成にとって重要な基本語といえる。しかし、ゴルトマンも、解釈の対象を „Geburt in den Tod“ に限定して、トラークルの詩作品における Tod の全般的な分類･分析を行っていない[17]。また、ジーモンは、「死は・・・詩人によって先取りされ、所有されるのだ。詩人は死と親密になるのだ」、といって、リルケの「親密な死」を引き合いに出しているが[18]、トラークルの場合「死」は親密なものではなく、リルケの場合よりもはるかに動的な存在として形象化され、詩人に絶望をもたらす強烈な存在として出現する。この強烈な存在としての「死」を理解するために、トラークルの現実の死、すなわち、コカインを大量に服用したことによる自殺（事故？）に想いを巡らせることは寄与しよう。

ところで、Tod　についてグリムの辞書は 537-551 頁にわたって詳細に説明しているが、この小論ではその全体を解説することが目的ではないので、詳しくは個々人で当たってもらうとして、その大枠のみを見てみると、次のように三つに分類されている。

I. der tot ist die auflösung des (zunächst menschlichen) lebens, das sterben sowohl als das gestorbensein, mag es auf natürliche oder gewaltsame weise erfolgen(.)[19]

II. Etwas todbringendes oder überhaupt vernichtendes, sehr verderbliches.[20]

III. Der mythologisch oder poetisch (schon öofter bei I und II) belebte tod.　über die mittelalteliche todesmythologie(.)[21]

もちろんトラークル自身も Tod　という言葉を当然、上記のグリムの説明によって明らかなように、単一の意味合いで使用しているわけではなく、日本語の「死」の射程距離を超え、日本語の「死」では表現し尽くせない意味を含ませて使用している。従って、トラークルが使用した Tod　を全て「死」をもって邦訳し、全て理解することができるとする見解には疑念がある。そこで、トラークルの場合、「＜本体的なもの＞と＜非本来的なもの＞を区別することは・・・完全に不可能である」[22]、といわれているが、「作品を正確に読むことができるひとが、作品を他人に対して正確に語ること、すなわち、作品を正確に解釈することができるのである。そして、作品を正確に読むことができる人のみが、文学に関する学によって提示されるそのほかの要請に答えることができるのである」[23]、という考えこそ文学研究の基本として妥当であると思われるので、この機会に、トラークルの詩作品における Tod の分類・分析を行い、トラークル研究にささやかな寄与をしたい。

II

ヴェッツェルの „Konkordanz zu den Dichtungen Gerorg Trakls“[24] を手がかりにザルツブルク版を見てみると Tod　は生前に発表された作品では 25 回、遺稿集では 34 回、合計で 59 回使用され、そのうち、タイトルのみに Tod が使用されている作品がそれぞれ一編ずつある（„Sieben Gesang des Todes“; „Auf den Tod einer alten Frau“）。遺稿集には生前に発表された作品の推敲段階の原稿が多く、重複している場合も多数あるので、この小

論では、遺稿集は援用に留めたい。また、„Traum und Umnachtung“ において使用されている Tod は、日本語の「死」という言葉の射程距離を明らかに超えているので、この散文詩で 4 回使用されている Tod はこの小論の中心を形成するはずなので、別個に独立させて扱い、当面の分類の対象は生前に発表された作品において使用された 21 の Tod に限定したい。

A）絵画、またはステンドグラスや彫像など造形された Tod：

1）Aus den braun erhellten Kirchen / Schaun **des Todes** reine Bilder, / Großer Fürsten schöne Schilder. （Die schöne Stadt）

2）**Des Todes** reine Bilder schaun von Kirchenfenstern; / Doch wirkt ein blutiger Grund sehr trauervoll und düster. （Winkel am Wald ）

この場合、造形されている対象は、死者の姿なのか、それとも、死という抽象的概念の具象的表現なのか、あるいは何か別な形象なのか、区別することは困難である。

B）比喩的に使用された Tod：

3）**Des Todes** ernste Düsternis bereiten / Nymphische Hände, ... / ... und in schwarzen Laugen / Des Sonnenjünglings feuchte Locken gleiten. （Melancholie）

4）O die Flöte des Lichts; o die Flöte / Des **Tods**. （Verwandlung des Bösen）

5）Weh, ihr goldenen Schauer des **Todes**, / Da die Seele kühlere Blüten träumt. （Anif）

6）Wo sind die furchtbaren Pfade des **Todes**, / Des grauen steinernen Schweigens, die Felsen der Nacht / Und die friedlosen Schatten ? （Frühling der Seele）

すなわち、これらの Tod は形容詞 tödlich として理解することも許されよう。

C）抽象概念としての Tod：

7）Sie tun wie arme Puppen vor dem **Tod**.（Allerseelen）

8）O die Nähe des **Todes**. Laß uns beten. （Nähe des Todes）

9）Die kühle Stube, die der **Tod** versöhnt. （Im Dorf）

10）O die Nähe des **Todes**. In steinerner Mauer / Neigte sich ein gelbes Haupt, schweigend das Kind, / Da in jenem März der Mond verfiel. （Sebastian im Traum）

11) Seele sang den **Tod**, die grüne Verwesung des Fleisches / Und es war das Rauschen des Waldes, / Die inbrünstige Klage des Waldes.
（An einen Frühverstorbenen）

12）Sieben Gesang des **Todes**（**Titel**）　（Sieben Gesang des Todes）

13）Angst！ des **Todes** Traumbeschwerde, / Abgestorben Grab und gar / Schaut aus Baum und Wild das Jahr; / Kahles Feld und Ackererde.　(Klage Ⅰ)

14) Schlaf und **Tod**, die düstern Adler / Umrauschen nachtlang dieses Haupt: / Des Menschen goldnes Bildnis / Verschlänge die eisige Woge / Der Ewigkeit.　(Klage Ⅱ)

15）Einbrach ein roter Schatten mit flammendem Schwert in das Haus, floh mit schneeiger Stirne.　O bitterer Tod.　（Offenbarung und Untergang）

この詩句と共に、この小論の中心テーマとして後に扱うことになる „Traum und Umnachtung“ の中の詩句 „Bitter ist der Tod“ が想起される。

16) Des **Todes** bleiche Blumen schauern / Auf Gräbern, die im Dunkel trauern - / Doch diese Trauer hat kein Leid.　(St.-Peters-Friedhof)

17）Daß sich des **Todes** Antlitz hülle / In ihrer Schönheit schimmernde Fülle, / Die Tote tiefer träumen macht.　(St.-Peters-Friedhof)

D）具体的な、Sterben としての Tod：

18) Ein blaues Tier will sich vorm Tod verneigen　（Verwandlung）

19）In dieser Stunde war ich im **Tod** meines Vaters der weiße Sohn.
（Offenbarung und Untergang）

20）sah ich, daß ihr Gesicht im **Tode** erbleicht und erstarrt war.　（Traumland）

21）Bald nach dem **Tode Marias** reiste ich ab in die Großstadt.　（Traumland）

E）Tod が 4 回も使用された „Traum und Umnachtung“ における Tod：

22）Haß verbrannte sein Herz, **Wollust, da er im grünenden Sommergarten dem schweigenden Kind Gewalt tat**, in dem strahlenden sein umnachtetes Antlitz erkannte.　Weh, des Abends am Fenster, da aus purpurnen Blumen, **ein gräulich Gerippe, der Tod** trat.

ここでは、「恐ろしい骸骨が、死が」「紫色の花々の中から歩み出る」といっているのであるから、この Tod は静力学的というよりもむしろ動力学的であり、単に絵画や彫刻等に造形された Tod でもないし、比喩的に使用された Tod でもないし、抽象概念としての Tod でもないし、全ての生命活動を失った肉体の具体的な Tod でもない。それ故、この Tod は、上の四種類の分類のいずれにも属さない。

23）O des verfluchten Geschlechts. Wenn in befleckten Zimmern jegliches Schicksal vollendet ist, **tritt mit modernden Schritten der Tod in das Haus**. O, daß draußen Frühling wäre und im blühenden Baum ein lieblicher Vogel sänge.

ここでは、「腐敗した足取りで死が家の中へ歩みいる」、といっているのであるから、この Tod もやはり、上の場合と同様に、静力学的というよりもむしろ動力学的であり、単に絵画や彫刻等に造形された Tod でもないし、比喩的に使用された Tod でもないし、抽象概念としての Tod でもないし、全ての生命活動を失った肉体の具体的な Tod でもない。それ故、この Tod も、上の四種類の分類のいずれにも属さない。

24）Ein umnachteter Seher sang jener an verfallenen Mauer und seine Stimme verschlang Gottes Wind. O **die Wollust des Todes**. O ihr Kinder eines dunklen Geschlechts.

ここでは使用されている Wollust は、1876 年に出版された Sanders の辞書によれば、„ein hoher Grad der Lust und des Wohlgefühls, ... nam. oft ... in Bezug auf sinnlichen Liebesgenuß“ を意味する。また、1906 年に出版された Heyne の辞書では、"früher ohne üble Nebenbedeutung" という但し書きが付いている。しかし、1910 年、即ち、トラークルが生きていた時代に発行された Weigand-Hirt の „Deutsches Wörterbuch“ によれば、„fleisches Lust"“ と説明されている。この説明に従えば、「死ぬほどの」あるいは「死に値する」「性的恍惚」と解釈することができるので、この Tod は上の分類 C、すなわち、抽象概念としての Tod に属する。

25）Tief ist Schlummer in dunklen Giften, erfüllt von Sternen und dem weißen Antlitz der Mutter, dem steinernen. Bitter ist **der Tod, die Kost der Schuldbeladenen;** in dem braunen Geäst des Stamms zerfielen grinsend die irdenen Gesichter.

この詩句において、トラークルの詩的世界における「死」（Tod）の意味内容が規定されている。即ち、Tod はトラークルにおいて「罪を背負う者の糧」であるといわれているが、これは肉体の死、肉体の物理的な終焉としての「死」を意味しているのではなく、「死」によってしか贖うことができない罪を犯した、という自覚に伴う精神的苦悩を意味している。辞書には、 „die Strafe des Todes“ [25] という表現も見いだされるが、既に詩人は自分の罪に鑑みて「最後には苦き死」（zu-letzt der bitter tod）[26] が残されているのみであることを自覚しているのである、それどころか、自分自身に「死」の審判を下しているのである。

しかも、その審判は、まるで『ヨハネの黙示録』におけるがごとく、詩人の内面において差し迫っていることを第 10 番目で扱った詩 „Nähe des Todes“ の次の一行が示している。

10) O die Nähe des **Todes**. Laß uns beten. (Nähe des Todes)

また、「死」の審判が差し迫っていることに伴う「不安」を第 13 番目で扱った詩 "Klage" において次のように表現されていた。

13) Angst ! des Todes Traumbeschwerde, / Abgestorben Grab und gar / Schaut aus Baum und Wild das Jahr; / Kahles Feld und Ackererde. ... (Klage I)

また、「罪の自覚」に伴う精神的苦悩としての「死」は詩「パッシオーン」第 1 稿において次のように言われている。

26) Zwei Wölfe im finsteren Wald
Mischten wir unser Blut in steinerner Umarmung
Und die Sterne unseres Geschlechts fielen auf uns.

O, der Stachel des **Todes**. (Passion Ⅰ)

即ち、「二匹の狼なる我らは暗い森の中で／われらの血を石のように固く抱き合って混ぜ合わせた」、と言っているのであるから、この場合、自覚された「罪」として、少なくともトラークルの詩的世界においてたとえ文学的虚構であったとしても、また、ニーチェの言葉を用いれば「神の死」の時代の混迷を、トラークルの言葉で言い換えれば「滅び」[27] を象徴する事象として最もふさわしい「近親相姦」が暗示されている、と解釈することができる。そして、詩人トラークルの心臓には、「近親相姦」に対して自ら下した「審判」としての「死」の「棘」が刺さったままになっているのである。この「死の棘」がトラークルの詩的世界の夕暮れを、夜を、闇を象徴的に奏でる通奏低音となっていて、Tod が全体として 59 回も使用された、といえる。

ところで、「罪を背負う者の糧」としての「死」は抽象概念である。それ故、この Tod は上の分類 C、すなわち、抽象概念としての Tod に属する。

Ⅲ

以上の分類･分析から、結局問題とすべきは、„Traum und Umnachtung“ の中の次の二つの Tod に限定される。

22) Weh, des Abends am Fenster, da aus purpurnen Blumen, **ein gräulich Gerippe, der Tod** trat.

23) Wenn in befleckten Zimmern jegliches Schicksal vollendet ist, **tritt mit modernden Schritten der Tod in das Haus**.

A) そこで、先ず、„ein gräulich Gerippe, der Tod trat“ のこれまでの日本語訳を参照したい。

1)「怖ろしい骸骨が、死が現れた」
（ホルムート、栗田、滝田訳、同学社、初版 1967 年、再版 1985 年）

2)「死が灰色の骸骨の姿で歩み出てきた」（平井俊夫訳、筑摩書房、1967 年）

3)「灰色がかった骸骨が　死が　現れた」（中村朝子訳、青土社、1983 年）（中村Ⅰ）

4)「灰色がかった骸骨が　死が　現れた」（中村朝子訳、青土社、1987 年）（中村Ⅱ）

5)「怖ろしい骸骨の死神が現れた」（瀧田夏樹訳、小澤書店、1994 年）

以上の五種類の日本語訳を比較検討すると、「死神」を用いた瀧田訳以外は全て「死」を用いているので、ここの Tod の邦訳は「死神」が適切なのか、それとも、「死」が妥当なのか、これが問題になる。

B) 次に、„tritt mit modernden Schritten der Tod in das Haus“ のこれまで の日本語訳を参照したい。

1)「腐敗した足取りで死が家の中に歩み入る」
（ホルムート、栗田、滝田訳、同学社、 初版 1967 年、再版 1985 年）

2)「死が黴のにおう足で家へ入ってくる」（平井俊夫訳、筑摩書房、1967 年）

3)「腐敗した足取りで　死が　家に歩み入る」（中村朝子訳、青土社、1983 年）（中村Ⅰ）

4)「腐敗した足取りで　死が　家に歩み入る」（中村朝子訳、青土社、1987 年）（中村　Ⅱ）

5)「腐敗する足取りで死が家の中に入ってくる」（瀧田夏樹訳、小澤書店、1994 年）

ここでは全員が「死」を用いて邦訳している。しかし、肉体の終わりとしての具体的な「死」は活動しないのであるから、静的であり、動的に「家の中に入ってくる」ことはできない。また、抽象的概念としての「死」が「腐敗した足取りで」、すなわち、死臭を漂わせ、骸骨の音を響かせながら、現実的に「家の中に入ってくる」ことはできない。それ故、これらの五種類の邦訳には矛盾がある。

C) そこで、上の A と B で明らかにされた問題を解決するために、辞書で Tod を調べてみると、次のようになる。

1) Heinsius: Volkthümliches Wörterbuch der deutschen Sprache. Hannover 1822.
uneigentl. ein Geripp(e) mit einer Sense und einer Sanduhr, welches den Tod

vorstellen soll (Klapperhein, Freund Hein).

2) Oertel: Grammatisches Wörterbuch der deutschen Sprache. München 1830.
die Neuern (bilden den Tod) als ein Gerippe mit Sense und Sanduhr, Sinnbildern des Wegmähens und abgelaufenen Lebenszeit (Klappermann, Knochenmann, Freund Hein mit der Hippe).

3) Heyse: Handwörterbuch der deutschen Sprache. Magdeburg 1849.
wohl persönlich vorgestellt, als Todesengel, als ein Gerippe mit Sense und Sanduhr(.)

4) Sanders: Wörterbuch der deutschen Sprache. Leipzig 1876.
so nam. personif. (Klapper-, Knochen-, Sensen-Mann...) ... als Subj. : Der Tod kommt, naht; ist vor der Thür; pocht an(.)

5) Hoffmann: Wörterbuch der deutschen Sprache. Leipzig 1884.
der Tod kommt, naht, ist vor der Thür(.)

6) Grimm: Deutsches Wörterbuch. Elfter Band. Leipzig 1935.
gestalt oder bildliche darstellung des todes ... :die maler mahlen (den tod) in der gestalt eines auszgedürrten schändtlichen ases (=Aas), welches nackend ist, keine ohren, augen noch nasen hat und mit einer sichel gewaffnet ist.

7) Aglicola: Wörter und Wendungen. Leipzig 1973.
(der Tod als symbolische Gestalt) der grimme (poe.), grimmige, bittere, drohende, unerbittliche Tod; ... der Tod mit der Hippe, Sense, dem Stundenglas, ... // der Tod kommt; der Tod nahte, winkte [ihm], klopfte, pochte [bei ihm] an; der Tod lauert [auf ihn]; steht vor der Tür(.)

8) Klappenbach: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. Berlin 1977.
symbolische Gestalt ...; der Tod als Gerippe, geh. verhüll. als Sensenmann; ... der Tod kommt, ruft (jn.), winkt (jm.), klopft (bei jm.) an, steht vor der Tür; ... geh. der Tod ... stand am Bett des Kranken(.)

9) Knaur: Grosses Wörterbuch der deutschen Sprache. München 1985.
das Sterben als Figur (Sensenmann) gedacht; der Tod klopft an(.)

10) Duden. Dsa große Wörterbuch der deutschen Sprache in sechs Bänden. Band 6. Mannnheim 1981.
(oft dichter. od. geh.) in der Vorstellung als meist schaurige, düstere, grausame Gestalt gedachte Verkörperung des Todes; die Endlichkeit des Lebens versinn-

bildlichende Gestalt: der grimmige, unerbittliche, grausame Tod stand vor der Tür; der Tod mit Stundenglas und Hippe; der Tod als Sensenmann; der Tod klopft an, ruft, winkt jm, lauert auf der Straße(.)

これらの辞書の説明に従えば、Tod には自然の、具体的・物理的、抽象的・概念的な「死」以外に「死神」の意味がある。

そこで、独和辞典で Tod を調べると、『独和言林』(白水社)、『相良大独和辞典』(博友社)、『フロイデ独和辞典』(白水社)、『独和中辞典』(岩波)にも「死神」の説明は掲載されているが、小学館の『独和大辞典』の説明が一番詳しいので次に引用しておく。

(ふつう定冠詞と)(死の象徴としての) 死神 (ふつう手に大鎌をもち、骸骨の姿で表される)

以上の辞書の説明で、Tod を骸骨の姿で表された「死神」と解釈して、何ら問題がないことが明らかにされた。すると、„ein gräulich Gerippe, der Tod trat“ の邦訳としては、瀧田訳が一番適切である、ということになる。瀧田は、個人訳(1994 年)の解説において、1967 年の共訳に「思い切って自分の解釈を加えた」[27]、といっているので、23 年間の研究の果てにこの Tod の邦訳を「死」から「死神」に改めたことになる。

また、グリムの辞書に引用されていた例文 „(tod) in der gestalt eines auszgedürrten schändlichen ases, welches nackend ist, keine ohren, augen noch nasen hat“ に鑑みれば、„tritt mit modernden Schritten der Tod in das Haus“ の Tod も「死」と解釈するよりも、「死神」と解釈することに妥当性がある。しかし、この Tod は、瀧田訳においても他の日本人の翻訳と同様に、「死」と邦訳されたままであり、これらの日本人の解釈には曖昧さが残されたままである。

D) 当該の Tod を「死神」とする解釈の正当性の根拠を求めて次に両詩句の英語訳を参照したい。

22) Woe, that evening by the window, when a horrid skelton, **Death**, emerged from scarlet flowers. [28]
(Weh, des Abends am Fenster, da aus purpurnen Blumen, ein gräulich Gerippe, der Tod trat.)

23) When every manner of destiny is accomplished in defiled rooms, **Death** enters the house with mouldering steps.[29]
(Wenn in befleckten Zimmer jegliches Schicksal vollendet ist, tritt mit modernden Schritten der Tod in das Haus.)

次に、英語の death を明らかにするために、辞書を調べてみると、death は次のように説明されている。

1）A Dictionary of the English Language.　By Samuel Johnson.（Knapton, Longman, Hitch & Hawes, Miller, Dodsley）London 1755,（Olms）Hildesheim 1966.
The image of mortality represented by a skeleton.

2）Webster's New World Dictionay, Collage Edition.（The World Publishing Company）Cleveland and New York 1959.
［D-］, the personification of death, usually pictured as a skeleton in a black robe, holding a scythe.

3）Webster's Third New International Dictionary.（Merriam）Springfield, Massachusetts 1976.
usu cap: the bringer of death personified and conventionally represented as a skeleton with a scythe（.）

4）The Oxford English Dictionay.　Second Edtion.（Clarendon）Oxford 1989.
as a personified agent.（Usually figured as a skeleton; ...）

5）Randam House Unabridged Dictionay.　Second Edition.（Randam House）New York 1993.
（*usually cap.*）the agent of death personified, usually represented as a man or a skeleton carrying a scythe.

6）The New Oxford Dictionary of English.（Clarendon）Oxford 1998.
（Death）［in sing.］the personification of the power that destroys life, often represented in art and literature as a skeleton or an old man holding a scythe.

これらの辞書の説明に従えば、death は、「死神」を意味する場合、通常 Death と固有名詞化されて大文字で書き始められるが、Stillmark の英訳では問題の二カ所の Tod は共に Death をもちいているのであるから、Stillmark が問題の二カ所の Tod を「死神」と解釈していることは明らかである。

E）以上明らかにされた Tod を「死神」と解釈する観点から見直すと、次の 4 カ所の Tod も「死」とする解釈よりも、「死神」とする解釈に妥当性がある。

27）Mit rosigen Stufen sinkt ins Moor der Stein
Gesang von Gleitendem und schwarzes Lachen
Gestalten gehn in Zimmern aus und ein
Und <u>knöchern grinst **der Tod** in schwarzem Nachen</u>.
（Mit rosigen Stufen sinkt ins Moor der Stein）

骸骨の姿を露わにして黒い小舟の中で「歯をむき出して笑う」ことができるのは、時が停止している絵画等に造形された「死」や、生物学的「死」や、抽象概念としての「死」ではなく、唯一「死神」であり、「歯をむき出して笑う」ことは「死神」にこそさわしい属性である。この関連において、„Sommersonate“ の次の詩句も思い出される。

Siehst du unter dunklen Föhren
<u>Grinsend ein Gerippe</u> geigen. (HKA I-269)

28) In Schenken träumend oft am Nachmittag,
In Gärten früh vom Herbst verbrannt und wüst
<u>Der trunkene Tod geht stumm vorbei und grüßt</u>
In dunklem Käfig tönt ein Drosselschlag. (Trübsinn 2. Fass.)

29) Kehr um - du Magt ! Ein Schritt noch vom Tor !
Ihr geliebten Frauen tretet doch vor !
<u>Der Tod vor der Schwelle</u> ! Bete für mich ! (Blaubart Ein Puppenspiel)

30) <u>Der Tod vor der Schwelle</u>: Laß mich sterben für dich.
Maria, - Jungfrau o bitt' für mich !
(Blaubart Ein Puppenspiel)

29 と 30 の Tod が「死神」であることは、すでに上で参照した Sanders と Hoffmann の辞書に掲載されていた同じ例文 „der Tod kommt, naht, ist vor der Thür“ が証明している。すなわち、聖者さえも死へと操る「死神」が敷居に立ち現れたので、「自分のために祈ってくれ」、と解釈することによって、死神に連れて行かれる恐怖と絶望が動的に表現されることになる。二冊の辞書に全く同じ例文が掲載されていることは、「死神」に関するこの形象が定型的なものであることを証明している。ここにおいて、ホルバインの „Totentanz“ [31] が想起されるが、ここではトラークルもペスト以来の「死神」の伝統的形象を利用している、といえる。

IV

以上の分類・分析から我々は結論として次のようにいうことができる。すなわち、エデンの園の追放と共に出現した「死神」[32] は信仰の力によって見せかけ上は危ういながらも押さえ込まれてきたが、ニーチェの宣言 „Gott ist todt“ によってその欺瞞の覆いは引きはがされ、新たに現代の「死神」が解き放たれてしまった。この現代の「死神」をクビーン以上に

ザイツは週刊誌 „Jugend“ において „Ein neuer Totentanz“ (Folge I~III) [33] として視覚化した。しかし、自己欺瞞に生きる小市民達はいまだに「神の国」の幻影をいたずらに追い求め、「神の死」に気づいていない。それどころか、聖者でさえも「神の死」に気づいていない。トラークルが愛読した „Also sprach Zarathustra“ において、ツァラトゥストラは次のようにいっている。

Ein neuer Todtentanz (III. Folge)

> Sollte es den möglich sein ! Dieser alte Heilige hat in seinem Walde noch Nichts davon gehört, dass Gott todt ist ![34]

それに反してトラークルはニーチェと共に「神の死臭」を敏感に感じ取り、「死神」が解き放たれたことを認識した少数派の一人である。そして、この認識を „Traum und Umnachtung“ において „ein gräulich Gerippe, der Tod“ と „tritt mit modernden Schritten der Tod in das Haus“ とによって詩的に造形化したのである。しかし、国語辞典に従えば日本語の「死」は絶対に「死神」を意味しない[35]。それ故、ここの Tod は、「死」と邦訳することによって曖昧模糊とさせておくのではなく、ニーチェの愛読から得た「神の死」に関するトラークルの認識を反映させて、「死神」と邦訳されるべきである。この結論に鑑みれば、„ein gräulich Gerippe, der Tod“ に限定されるといえども、邦訳としては唯一瀧田訳が正しい解釈を提示した、といえる。

注

1) Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe. Fünfte Abteilung. Zweiter Band. Hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari. (de Gruyter) Berlin・New York 1973. S. 255f.
2) Martin Heidegger: Holzweg. (Klostermann) Frankfurt am Main 1950, vierte Aufl. 1963.
3) a.a.O.: S. 193 - 247.
4) Nietzsche Werke: a.a.O., S. 158f.
5) vgl. Heinz Wetzel: Konkordanz zu den Dichtungen Georg Trakls. Trakl-Studien Bd. 7. (Otto Müller) Salzburg 1971. S. 813f.
6) Hans Weichselbaum: Georg Trakl. Otto Müller, Salzburg 1994, 2. Aufl. 1995. S. 42 u. Anmerkung Ⅱ-8.
7) a.a.O.; u. vgl. Otto Basil: Geork Trakl in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. (Rowohlt) Hamburg 1965, S. 114.
8) Nietzsche Werke. a. a. O., S. 255f.
9) Geork Trakl: Dichtungen und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. v. Walther Killy und Hans Szklena. Bd. 1. (Otto Müller) Salzburg 1969. S. 196, 197, 198. (=HKA)
10) HKA: S. 147.
11) vgl. Wetzel: a.a.O.
12) Menschheitsdämmerung. Ein Dokument des Expressionismus. Neu hrsg. v. Kurt Pinthus. (Rowohlt Taschenbuch) Hamburg 1972. Titelblatt.
13) Ernst Hanisch・Ulrike Fleischer: Im Schatten berühmter Zeiten. Salzburg in den Jahren Georg

Trakls (1887-1914). (Otto Müller) Salzburg 1986. S. 200.

14) Eduard Lachmann: Kreuz und Abend. Eine Interpretation Georg Trakls. (Otto Müller) Salzburg 1954. S. 177.

15) Otto Mauer: Alfred Kubins Traklsche Verwandlung. In: Georg Trakl・Alfred Kubin: Offenbarung und Untergang. Die Prosadichtungen. Mit dreizehn Federzeichnungen von Alfred Kubin. (Otto Müller) Salzburg 1947, 2. Aufl. 1966.

16) a.a.O.: S. 5.

17) Vgl. Heinrich Goldmann: Katabasis. Eine tiefenpsychologische Studie zur Symbolik der Dichtungen Georg Trakls. (Otto Müller) Salzburg 1957. S. 110-117.

18) Klaus Simon: Traum und Orpheus. Eine Studie zu Georg Trakls Dichtungen. (Otto Müller) Salzburg 1955. S. 93.

19) Jacob Grimm und Wilchelm Grimm: Deutsches Wörterbuch. 11. Bd. I. Abteilung, I. Teil. (Hirzel) Leipzig 1935. S. 537. (=Grimm)

20) Grimm: S. 546.

21) Grimm: a.a.O.

22) Wolfgang Kayser: Das sprachliche Kunstwerk. Eine Einführung in die Literaturwissenschaft. 5. Aufl. (Frank) Bern u. München 1971. S. 124.

23) a.a.O.: S. 12.

24) Heinz Wetzel: S. 660f.

25) P.F.L. Hoffmann: Wörterbuch der deutschen Sprache, nach dem Standpunkt ihrer heutigen Ausbildung. (Friedrich Brandstetter) leipzig 1884. S. 579.

26) Hans Sachs: Werke in 26 Bdn. Hrsg. von Adelbert von Keller und E. Goetze. (Bibliothek des Litterarischen Vereins in Stuttgart) Tübingen 1870–1908. Bd 19, 1891. S. 172.

27) HKA: S. 59.

28) トラークル詩集、瀧田夏樹訳、小沢書店、1994 年。198-9 頁。

29) Georg Trakl: Poem and Prose. A Billingual Edition. Translated from German and with an introduction and notes by Alexander Stillmark. Northwester University Press 2005. S. 105.

30) a.a.O.: S. 107.

31) vgl. Der Totentanz. Vierzig Holzschnitte von Hans Holbein dem Jüngeren. Faksimilie Nachdrucken der ersten Ausgabe mit einer Einleitung von Dr. Hans Ganz. (Holbein-Verlag) München ca. 1925.

32) a.a.O.

33) vgl. Jugend. Münchner illustrierte Wochenschrift für Kunst und Leben. (Hirth) München & Leipzig. Jg. 1 (1896), Heft 16, S. 252, 253; Jg. 2 (1897), Heft 26, S. 432, 433; Jg. 3 (1898), Heft 10, S. 160, 161; Jg. 4 (1899), Heft 14, S. 218, 219.

34) Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe. Sechste Abteilung. Erster Band. Hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari. (de Gruyter) Berlin・New York 1973. S. 8.

35) 下記の国語辞書を参照：

＊日本国語大辞典、第二版、第六巻、小学館、2001 年。425 頁。

＊広辞苑、第二版、岩波書店、1969 年。935 頁。

＊岩波古語辞典、岩波書店、1974 年。593 頁。

２０１２年度活動報告

1. 5 月 19 日（土）2012 年度春季総会・研究発表会が豊島区雑司ヶ谷地域文化創造館において開催された。

総会

（1）『トラークル研究』第九号の発行は、10 月 1 日を目途に発行する。

（2）2012 年度秋季総会及び研究発表会

日時：10 月 13 日（土）　会場：日本独文学会会場に近い公共施設を予定

（3）トラークル没後 100 年及び本会の創設 20 周年記念事業

特集号を刊行する（論文を 3 本以上掲載、随想を会員全員に依頼）。その他として記念パーティーを催す。ザルツブルクの記念祭に参画する。等の提案がなされた。

（4）会員児玉昭人氏の御厚志の取り扱いについて

御厚志を寄付金としていただき、上記特集号刊行の一助とする。

（5）2011 年度決算

本会の 2011 年度決算が承認された。

2011 年度決算報告

トラークル協会 2011 年度決算報告 自 2011 年 4 月 1 日　至 2012 年 3 月 31 日			
収　入　の　部		支　出　の　部	
科　目	金　額	科　目	金　額
前年度繰越金	６２６５６	会場費（金沢市文化ホール）	２６２０
本年度会費	３６０００	切手代	５２６０
		「トラークル研究」第八号	
		印刷代（振込手数料を含む）	１７７４５
		封筒代	１００１
		コピー用紙	７１４
		本年度支出合計	２７３４０
		次年度へ繰越	７１３１６
		（内、本年度剰余金	８６６０）
合　計	９８６５６	合　計	９８６５６

研究発表

保坂直之　：　ルートヴィヒ・フォン・フィッカーの Rauch Villa におけるトラークル

三枝紘一　：　トラークルの詩最終三部作

２．10 月 13 日（土）2012 年度秋季総会・研究発表会が府中市文化センターにおいて開催された。

総会

（１）『トラークル研究』第九号は、10 月 1 日発行の予定であったが、事情により 12 月に延びる予定

（２）2013 年度春季総会・研究発表会は、5 月 25 日（土）、日本独文学会の会場の近辺の公共施設を予定

研究発表

高橋喜郎　：　トラークルの詩における rosig の用法について

三枝紘一　：　トラークルの詩における植物についての若干の考察

３．3 月 15 日（金）２０１２年度幹事会が開催された。

お知らせ

１. 2014 年度春季研究発表会に発表希望の方は、2 月末日までに論題をお知らせください。

２.「トラークル研究」第１１号に論文等を発表希望の方は、２月末日までにお知らせください。

３．会費未納の方は、御納入のほどよろしくお願いします。

編集後記

発行が大変遅れて申し訳ございませんでした。お詫び申しあげます。

さてトラークル没後 100 年まで後 1 年となりました。没後百年（併せて当会創設 20 周年）記念事業のメイン企画として記念特集号（『トラークル研究』第 11 号）を刊行する予定です。つきましては各会員の皆様には、論文及び随想あるいは感想を奮って御寄稿くださるよう切にお願い申し上げます。（さ）

トラークル協会会則

1995 年　9 月 20 日制定
2003 年 10 月 18 日改正
2004 年 10 月　1 日改正
2005 年　5 月　3 日改正

第一条（名称）本会はトラークル協会と称する。
第二条（目的）本会はトラークル文学の普及、及びその研究の促進を図ることを目的とする。
第三条（事業）本会は年２回総会・研究発表会を開催する。また年一回研究誌を発行する。その他本会にかなう事業をする。
第四条（会員）本会の会員はトラークル文学及びその時代に関心を有する者とする。
第五条（役員）本会は会長（あるいは代表幹事）をおくことができる。
また若干名の幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）をおく。
会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）は総会において選出する。
会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）の任期は２年とし、再任を妨げない。
第六条（顧問）本会には顧問をおくことができる。顧問の委嘱は総会で決定する。
第七条（会費）本会の経費は会費、その他の収入によって支弁し、会費は年額２０００円とする。
第八条（決算）本会は毎年度決算をし、総会に報告する。
第九条（改正）本会則の改正は総会の出席者の３分の２以上の賛成を必要とする。

（備考）本協会の事務所在地を当分のあいだ、三枝紘一気付とする。